

## 半分ほどの講座 好評のうちに終わる！

5月から始まった文芸館主催の講座の半分ほどが終了しました。事後のアンケートから、いずれも概ね満足していただけた内容であったように思います。

ここでは、最初に終了した「俳句入門講座 前期」から、参加された方の感想をご紹介します。

- わかりやすく、時に楽しく俳句のイ、ロ、ハを教えていただきました。自然を見る目がかかりました。よい時間でした。
- 全くの初心者でしたが、わかりやすく且つ内容もおもしろく、参加してよかったと思います。講師の解説は機知に富んだもので、2時間飽くことなく受講できました。
- 俳句の季語や言葉など、今まで気づかずに過ごしてきたのでいろいろな事が新鮮でとても楽しい講座でした。
- 大変参考になる点が多く、講座を受けてよかったと思いました。とても楽しい5日間でした。感謝しております。

## 文芸館の四季

「こう暑くっちゃ花を愛でる気持ちも起こらないよ…」

これは梅雨が明けて猛暑が続いていたころの、文芸館をよく利用してくださる方の言葉。私も思わずうなずいてしまいました。

花のかわりに周囲の木々からは、喧噪に似た蝉の鳴き声が耳の奥に突き刺さります。文芸館の夏は、その訪れを耳から感じるのだということを知りました。

それでも花に関してうれしかったのは、はじめてシロザクロの花を見られたことです。

2階の和室東側の窓の外、手を伸ばせば届くぐらいのところに咲いていました。私が知ったときには、すでに盛りを過ぎていましたが、黄色やピンクの色合いをした花は、何だか南国情緒を醸し出していました。

この木の根元にはこんな説明書きがあります。

志賀直哉邸にあったシロザクロの実を藤枝静男が持ち帰り、種を蒔いたところ、発芽し成長したもの。

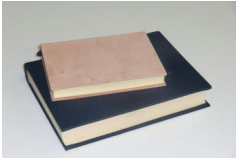


何と文芸館にふさわしい花ではないでしょうか。

また7月の強い日ざしの中、日陰を選びながら駐車場を歩いていると、甘い香りが鼻をくすぐりました。香りの元を探すと、頭上に乳白色のモッコクの花が下を向いて咲いていました。まるで緑陰で休む人に、香りのサービスをしてくれているようです。

## お知らせ

- 「浜松市民文芸」第57集の作品募集要項が一階入り口のケースの上に置いてあります。ふるってご応募ください。
- 販売コーナーの棚に遠州綿紬を素材とした「文庫本カバー」をご用意いたしました。ひとつひとつデザインが異なる手作りの品です。よろしかったらご購入ください。



## 浜松文学紀行 1

### 浜松駅と鷹野つぎ、森鷗外

諏訪湖を源流に山間<sup>あい</sup>をとうとうと流れ下る天竜川、洋々たる遠州灘に沿って延々と続く大砂丘。西には風光絶佳の浜名湖を抱き、北は三方ヶ原台地の彼方に引佐、北遠の山々がつらなっている。

このように自然環境に恵まれ、古来東海道の要衝<sup>しょう</sup>であった浜松は、「万葉集」を始め多くの古典文学の舞台となってきた。

東海道線開通後は、東京と大阪の中間駅として賑わった。新幹線が開通すると滞在者は激減したが、東田町で医院を開業していた藤枝静男の縁で、中央文壇の一線作家たちが浜松を訪れるようになった。

また、浜松は吉田知子を始め地元出身の作家も多い。浜松文芸館には地元ゆかりの文学者などの資料が多数収蔵されている。

本号よりこの紙面を借りて、浜松を描いた文学作品の数々を、思いつくままに順次紹介してみることにする。



明治 22 ( 1888 ) 年9月、東海道線浜松一豊橋間が開通、浜松停車場が業務を開始した。翌年4月に天竜川の鉄橋が完成、新橋から長浜間がようやくつながった。木造平屋瓦葺きの駅は、「ハママツステンション」と呼ばれ親しまれた。

明治 37 ( 1904 ) 年2月に日露戦争が勃発、浜松駅は兵隊の途中休憩駅となり、駅前広場には接待所が設けられた。

浜松高等女学校に在学中の鷹野つぎらは、兵士たちの接待に駆り出された。

「放課後には、私たちは殆ど連日、浜松駅に帰還兵を送迎しに行った。停車場近傍の宿舎には、多分急造バラック建てかど覚えてあるが、広い食堂の一隅にオルガンが据ゑてあつて、私たちは兵士の休息してあるときに、歓迎歌、或ひは慰労歌を唄った。」  
(「春夏秋冬」)

つぎは日清、日露、第一次世界大戦、満州事変、太平洋戦争に遭遇し、戦争さなかの昭和 18 ( 1943 ) 年の3月、肺結核で没している。

「渋江抽斎」や「佐橋甚五郎」に浜松を登場させた森鷗外も、軍医として戦地に渡り、凱旋帰国の途次浜松駅で浜松婦人会の慰労、歓迎を受けている。その時鷗外を迎えたのが産婦人科医内田六郎の養母で浜松最初の女医内田みつであった。

六郎は、荻原井泉水主宰の自由律俳句の「層雲」同人で、種田山頭火とも親交が深かった。また硝子絵、大津絵、浮世絵、陶器の蒐集家で、著書に「家蔵江戸版和欄絵」、<sup>イランタ</sup>「硝子絵」、句集「鶴を待つ」等がある。浜松市美術館は、六郎のコレクションが中心となってオープンした。六郎は同業の作家藤枝静男の骨董の師匠でもあった。「今、ここ」はじめ静男の随筆には、しばしば六郎が登場してくる。

「大宮人の旅衣 入り乱れけむ萩原の 昔つばらにたづねつる」で始まる旧「浜松市歌」と「市行進曲」は共に鷗外の作詞で 90 年前の大正 10 ( 1921 ) 年7月1日の市制十周年記念にあわせてつくられたものである。